

次の文章を読み、後の問に答えよ。

①「責任」という言葉は、往々にして大声で唱えられる。責任とは、ある事態を惹き起こす原因となる行為をなした者として、その結果に対して「咎」がある、したがってなんらかの「責め」を引き受けさせられるということである。「咎」を認めてみずから「責任」をとる場合ももちろんあるが、たいていは他者から指摘されて、あるいは判定されて、とらされるものである。とりわけ、あるのつぴきならない事態を前にして、それを惹き起こした原因となる行為がにわかには突き止めがたいとき、それはそれにかかわった特定のひとへの性急な責任追及になりがちである。だれも責任をとらない政治や、不正をくり返す企業へのひとびとの苛立ちが、たとえば謝罪会見という名の「責任追及」の儀式を厳しいものにするのがしばしばあるのは、よく知られていることである。責任の所在が複雑で見えにくいこと、あるいは責任を逸らす言辞の蔓延。そうした状況のなかで、ひとびとの苛立ちが飽和状態にいたる。だれかが責任をとるよりほかなくなるのである。

②そういう空気が支配しているところでは、ひとは、果てしないバッシングや追撃を怖れて、自分が責められないようあらかじめ手を打つことにやつきになる……。

③ここに三者三様のひとたちがいる。

④まずは、五木寛之さんと香山リカさんの対談『鬱の力』のなかに出てくる患者の話。香山さんが精神科医になったばかりの頃は、「うつ病」だと診断書に書かないでくれとよく患者さんに言われて困った。ところが最近「うつ病」だと書いてほしいという患者さんが増えて困っているというのだ。「うつ的です」と言っても、「いえ、うつ病なんです」と言っけかない患者さんもいるという。「うつ病」と「鬱な気分」とがごっちゃにされている、と。

⑤「あなたの場合は、うつ病と捉えなくても結構です。こういう悲しい出来事があったら、しばらく落ち込むのは当然ですから、時間が経てばちゃんと回復できますよ」と言っても、安心せず、逆に「じゃあ、私のこの気分は、いったいなんなんですか」と言い返される始末。「病気じゃない」と言われても、当人は納得しないのだ。

⑥なぜか。香山さんの理解はこうである——「ただの『鬱気分です』って言われてしまったら、あとは自分の考え方とか生き方とかに直面して、自分で取り組まなければいけない課題になってしまう。でも『うつ病』ということになれば、病人なんだから『お任せします』と言えど済む。受け身の立場で手当てされたい、ケアされたい、流行り言葉でいえば『癒されたい』ということもあると思うんです」。

⑦何をやってもうまくゆかない、なんか状況が塞いだままそこからうまく抜けだせないといったとき、ひとはその理由を知りたいと必死に思う。が、鬱ぎの理由というのはそうかんたんに見つかるものではない。けれども、解決されないままこの鬱いだ時間をくぐり抜けるのもしんどい……。ということになれば、a 多くのひとが、自分のこの鬱ぎを説明してくれる「物語」があればすぐにそれに飛びつくというのは、見やすい道理である。わたしがいまこうでしかありえないのは、あのときあんな体験を強いられたからだ、出生をめぐるこういう状況があったからだ。そう、いま自分がこうでしかありえないのは自分のせいではない、あの「事件」が自分にこうした鬱ぎを強いているのだ……。というわけである。「トラウマ」や「アダルトチルドレン」という言葉はそういうふうに使われた。

⑧しんどさを自分の問題として引き受けるのではなく、自分が引き受けさせられている問題として受けとめる。「わたしが悪いのではない」「すぐに少しでも楽になりたい」、そんな気持ちがあるどこかできっと働きだしているのだろう。たしかに自分の鬱ぎが病気に起因する、あるいはわたしが過去に受けたひどい仕打ちに起因すると考えれば、楽になれる。「悪いのはわたしではない」のだから。

⑨「悪いのはわたしではない」という、この切々とした、しかしちょっとわがままな訴えを「責任はわたしにはない」と言いかえれば、役人の逃げ口上となる。延々と弁解をつづけたり、逆に「遺憾に思います」と謝るふりしてじつは開きなおる役人。かれらの顔には「責任はわたしにはありません」と書いてある。責任がみずからにかからないようあらかじめ手を打つことにばかり、優れたその知性を用いているのではないかと勘ぐりたくなるような役人がたしかにいる。政治家もしばしば同じようにふるまう。ほんとうは「わたしが悪かった」と潔く言えるひとのほうがかえって信頼されるものなのに。

⑩そして最後に、教育や医療といったソーシャル・サーヴィスの現場で、そのサーヴィスが滞ったり劣化したりしているように見えるとき、役所に猛烈な苦情や文句をぶつけるばかりで、みずから解決のために奔走することを考えもしない「クレーマー」たち。税金を、あるいはサーヴィス料をちゃんと払っているのだから、わたしには落ち度はないというわけだ。「クレーマー」は他者の責任を問いつめるが、そのクレームが「もつと安心してシステムにぶら下がれるようにしてほしい」という受け身の要求であることに気づいていない。多くの市民も陰に陽にそうした意識に染まっている。自分たちのそばで起こった難事も、役所に苦情や文句をぶつけるばかりで、みずから解決のために奔走することを避けている。「問題」を自分の「課題」とし

て引き受けるということを避けている。そんな親をまねてか、この頃の学校では、授業がつまらないと、こましやくれた生徒は「先生の教え方が悪い」とクレームをつけることも少なくならしい。いずれにせよ、すぐに答えを求める気の短さと、責任を引き受けることから逃げて楽になりたいという気持ち。この二つのメンタリテイがいつ頃からか、ひとびとのうちに平然と居座るようになった。

⑩この三つ、脈絡はばらばらであるが、見ようによってはほとんど同じである。

「X」……と言いうるポジションをとろうという目論見である。右の三者、いずれも進んで責任をとろうとは考えない。

⑪もはや旧聞に属することと言ってもよいが、米国のオバマ大統領がその就任演説の最後のところで、「新しい責任の時代」というスローガンを口にし、「米国民一人ひとりが自身と自国、世界に義務を負うことを認識し、その義務をいやいや引き受けるのではなく喜んで掴みとること」を訴えた。

⑬ b 「責任」というこの言葉、英語ではリスポンシビリティ (responsibility) である。この語には、日本語の「責任」という言葉からは感じられない独特の含意がある。リスポンシビリティとは、文字どおりに訳せば、「リスpondする能力」、つまり他者からの求めや訴えに応じる用意があるということである。さらにそれをラテン語源に分解すれば「だれかからの約束に約束し返すこと」(re-spondere) という意味である。

⑭日本語で「責任」と言えば、国家の一員としての責任、家族の一員としての責任というふう
に、組織を構成する「一員」として果たさねばならないことがらを思い浮かべる。が、それは匿名の役柄における責任であって、まぎれもなくこのわたしがいまだれかから呼びかけられているという含みはない。これに対して欧米のひとたちは、伝統的に、ひととしての「責任」を、他者からの呼びかけ、あるいはうながしに応えるという視点からとらえてきた。この他者
はかれらにとっては神でもありうる。だから職業のことを、とくに使命や天職の意味を込めて、コーリング (calling) と呼ぶことがある。まさに何かをするべく神から呼びだされているという感覚である。

⑮考えようによっては、阪神淡路大震災のあと、空前のヴォランティア・ブームが起こったとき
にひとびとがとっさに抱いたのは、この、いま自分が呼びだされているという感覚ではなかつたのかと思う。仮設の避難所に遠くから赴いたひとたちは、自分はだれも知らないちっぽけな存在だけれど、そして会社でもいつも何をやっても「あたりまえ」、とくに評価されるわけ

はないけれど、ここでは「ああ、また来てくれたんやね」と、他とは違うこのへ顔として認められ、ただたどしいけれどもまぎれもなくこのわたしの言葉で話すことができる。ねぎらいあうことができる。そのとき、ひとびとがもしその動機を訊かれたら、「責任」という言葉はもちだしにくくても、「レスポンスビリティ」という言葉に対応する言葉が日本語にあれば、きつとそれで表現したことだろう。

⑩もちろん、名ざしで呼びだされている者としての自分を意識することには、けっこう危うい面もある。他のだれでもなくこの自分が何者かからとくに召喚されているという意識が過大なまでにふくらんで、自分を他に優って囑望された人間、つまりはエリート(選良)と考えてうぬぼれてしまいうるからだ。あるいは逆に、つねに他人による評価と称賛を求め、ときに卑しいばかりに他人に取り入ろうとするからだ。

⑪この点で、オルテガ・イ・ガセットによるエリートの定義はふるっている。かれは言う。大衆とは「自分以外のいかなる審判にも自分をゆだねないことに慣れている」ひとであり、エリートとは「自分を超え、自分に優れた一つの規範に注目し、自らすすんでそれに奉仕するとうやむにやまれぬ必然性を内にもっている」ひとである、と。そういえば、みずからの務めを「公僕」と称したひとたちがかつていた。他人の分まで責任を引き受け、黙していつさい弁明しない、そんな政治家や経営者がそれである。

⑫ちなみに、カントという、原則を重視するドイツの哲学者は、このことを「なすべきであるがゆえになしうる」と表現する。何かをしようという主体の意志の方針がそのままいつも普遍的な正しさにつながるように行なわなければならないというカントの主張は、「すべき」ことが「したい」ことであるという境地においてこそ、ひとは真の意味で幸福であるに値するものとなりうるという考えにいたりつく。

⑬これに対してヴォランティアという活動には、多くの人を一つの目標へと糾合する「べし」(原則にもとづく義務)というものがない。ここでは、だれかが一枚の正確な青写真を描いて、それを軸に全員が結集するというやり方をとらない。それでも、集ったひとたちのゆるやかなイメージの交換と調整のなかで、つまり最後までたがいの差異を解消しないまま、それでも最後はこれ以外にはないという一つのところへもってゆく……という動き方をしようとする。これを言いかえると、いま何が必要か、それを自分の「やりたい」ことのほうからではなく、他者からの呼び求めに応じて考え、そして動くということである。

⑭このことが、d 逆説的にもひとを受け身でなくす。「これ、わたしの所轄ではありません」

というのではなく、「これ、わたしやっときましようか」という感覚である。ここでは他者に認められる、e 他者の意識の宛て先に自分がついているという感覚が、ひとを突き動かす一つの支えとなっている。

る。

(鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい?』によ

問一 傍線 a 「多くのひとが、自分のこの鬱ぎを説明してくれる「物語」があればすぐにそれに飛びつく」とあるが、なぜ多くのひとが「物語」に飛びつくのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

- 1 責任を引き受けることから逃げてすぐに少しでも楽になりたいから。
- 2 自分自身の課題として取り組むためには「物語」が必要だから。
- 3 「うつ病」と「鬱な気分」とを混同しているため安心できないから。
- 4 外的な要因があれば、ただの鬱気分だと言われても納得できるから。
- 5 鬱いだ状況から抜け出すために自分の考え方や生き方を変えたいから。

問二 空欄 X に入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

- 1 遺憾に思います
- 2 先生の教え方が悪い
- 3 すぐに答えを出したい
- 4 意図して行ったわけではない
- 5 悪いのはわたしではない

問三 傍線 b 「責任」というこの言葉、英語ではリスポンシビリティ (responsibility) である。この語には、日本語の「責任」という言葉からは感じられない独特の含意がある」とあるが、その「独特の含意」とは無関係なものを次の中から一つ選べ。

- 1 何者かからの召喚にすぐに応じる用意があること。
- 2 他ならぬこの私が神に呼びだされ、うながしに応えること。
- 3 組織の一員として、義務を喜んで掴みとること。
- 4 他者からの呼び求めに応じて考え、自ら行動すること。
- 5 何かに突き動かされ、震災後にヴォランティアに赴くこと。

